

ICT教育とオンライン授業について

湯 浅 康 雄

1 テーマについての現状

まず、児童の家庭での現状について述べる。昨今の携帯端末の普及には目を見張るものがあるが、高学年ともなるとタブレット端末の扱いは手慣れたものである。私が担任している5年生の児童から聞き取ったアンケートにおいては、学級の約半数以上が家庭にタブレット端末を所有していた。スマートフォンを含めるとほぼ全員が家庭で携帯端末のメディアを日常的に扱っていることがわかった。また、児童は習い事においても、新型コロナウイルス感染予防のためリモートでの学習やタブレットを利用した学習が増えており、ICT機器の利用に関して児童は抵抗がないように感じられる。むしろ、学校現場で行われている教科書などの紙媒体のみでの学習は自宅学習との大きな差を生んでいるともいえる。これからはこの現状を理解した上で教育を行っていく必要があると考える。小学校の教育では一斉授業を行うことで多様な考え方や柔軟な発想を生かすことができるよさがある。その利点を発揮し、ICTを活用することでさらなる学力の向上を図ることができると思う。

次に本校の現状について考える。現在、本校には140台のタブレット端末があり、学校生活の様々な場面で活用されている。授業ではもちろん、高学年になると係活動でも児童がアプリを使いこなして学級で発表会を行っている。また、書画カメラやプロジェクターは各学級にあり、授業の効率化を図ることができている。タブレット端末内には、デジタル教科書やコマ送りで動画が撮れるアプリがあり、様々な場面で効果的な学習をすることができる。

現在、八千代市はGIGAスクール構想により、一人1台の整備や高速ネットワークの構築が進んでいる。今後このように学校にもICT端末が普及することで、私たち教員はさらなるICTを活用した授業を行う力が求められる。また、将来的に新型コロナウイルス感染症のようなウイルスの感染拡大が起こった場合、オンラインでの授業も行われることが予想される。実施には機材の整備などの課題は多く残るが、海外の状況をみると近い将来オンラインでの授業実施も行われるはずだ。そうした時が来てもすぐに対応していけるよう、日々の鍛錬を忘れてはならない。以下に今年度実践した取り組みや課題について述べ、今後の教育活動について考えていく。

2 具体的な取組

(1) パワーポイントやワードを活用した授業

社会科での新聞作りでは、ワードを使ってまとめを行った。文字の大きさや色、写真の挿入まで、基本的な文章作りの仕方を指導していった。個人差はあるが、操作方法を理解すると児童それぞれの工夫がみられた。最初は不慣れな部分が目立ったが、授業の後半になるとより伝わりやすい方法を考えてまとめようとする

様子があつた。改めて児童が新しいことを吸収する早さを感じた。

また、国語の「ひみつを調べて発表しよう」の学習では、「6年生が学校のためにながらんでいること」についてパワーポイントにまとめて1～4年生にプレゼンテーションを行った。文字の大きさや写真の扱い方は新聞づくりで学習したものが生かされており、アニメーションを使うことに注目して、よりうまく伝えようとする児童が多かった。全体指導では基本的な使い方の指導のみだったが、児童は様々な工夫をしてスライドを作成することができた。

(2) Qubena を活用した学習

本校では、今年度算数の学習アプリ Qubena を利用した学習についての指定校となった。Qubena は今学習している単元はもちろん、これまでに学んだ単元にも戻って学習できるアプリである。主に練習問題を解くときに扱った。児童は意欲的に取り組み、何度も繰り返し問題を解きなおす姿が見られた。解いた答えに対してすぐに答えがわかり、解説もされるので学習理解を深めることができた。

3 成果と課題

(1)の成果として、一つ目に挙げられることがプレゼンテーションの仕方を学び、活用することができたことである。スライドの作り方や写真の取り入れ方を理解し活用できたことはICT活用に向けての大きな一歩となる。二つ目として、人前で話す経験ができたことである。聞く側のことを考えてスライドを作成し、学級の友だち以外と話す機会は、普段の授業ではなかなか実施できない。初めて対面する人に対して発達段階に応じて話すことで、これからの社会で必要不可欠となるコミュニケーション能力の向上を図る一端を担うことができたと考える。

課題としては大きく二つある。一つ目はタイピング能力のさらなる向上を図ることである。打ち込みたい言葉は頭に浮かんでいるが、打ち込みができなくて、作業が進まないことがあつた。ローマ字の学習は既習事項だが、キーボードを扱う学習ではタイピングが必須となることから、ひらがなは打ち込めるように力を身に付けさせる必要がある。二つ目は、自分の思いや考えを伝えられるようにすることである。普段から話し慣れていないと、声が小さくなってしまったり話の順序が整わなかったりして相手に伝わりにくくなってしまふ。普段の授業から意識して伝え合うことを行っていきたい。

(2)の成果としては、意欲的に取り組み、くり返し問題を解くことができたことがよかった。解説があることから教師が振り返りを行わなくてもそれぞれのペースで行うことができた。

課題としては、それぞれのペースで進められることから、特に振り返りたいことが全体として進めることが難しい点である。このことに関しては、Qubena の学習で学んだことを生かして、紙媒体での練習問題を解いて確認し、進めていく必要があると感じた。

4 新たな教育に向けての提言

これからの社会は、ICTの活用がさらに進んでいくと考えられる。感染症対策から急速に進んだりリモートワークやオンライン授業を行うことは、これからの社会では当たり前のように扱われていくと考えられる。こうして社会全体がICT活用に進んでいるが、世界から見ると日本はまだまだこの分野においては大きく遅れている。これから小学校ではタブレット端末を増やして児童が使えるようになっていくが、教師はその先を考えていかなければならない。そのタブレットを使いこなすことはもちろんだが、活用していく方法を知り、児童に指導できるようにしていかなければならないと考える。今の職業のいくつかは、数年後にはロボットや機械が行うことで補えるようになるために就職先としてなくなっていくといわれている。それらに共通するのは単純作業である。考えなくてもできること、創意工夫の必要がないものは今後人間が扱っていかなくてもよいものとして考えられるようになるだろう。

そこで、これからは「発想力」や「対応力」が必要になってくると考える。ロボットにはない人間ならではの「表情」や「臨機応変に対応する力」は人間が持っている強みである。こうした力を身に着け、機械にはできない能力を発揮できるようになっていくことが大切である。これからの社会を担う児童のために、このような力が身に着けられるよう、教師自身の能力向上を図り、指導をしていかなければならないと考える。私自身も、さらなる能力の向上のために日々努力をしていきたい。